東京バッハ合唱団 月報

［第 758 号］2025 年 8 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR TOKYO
Monthly Newsletter No.758
August 2025
—
5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo Japan

〔私の愛読書 ご紹介〕

那須田 務［著］『教会暦で楽しむ バッハの教会カンタータ』

山本 弘史（後援会員・医師、山形市在住）

私たちは、バッハが大好きであり、その延長線上にカンタータも素晴らしいね、という感想を持っている。しかし、カンタータを日常的に聴くという習慣は、多くの人々にはなく、その知識も豊富とは言えない。その理由は、まずカンタータの数が 200 曲と多すぎるくらいであり、その中でとびきりの名曲コラール「主よ人の望みの喜びよ」をふくむ作品（BWV 147「心と口と行いと生きざまもて」）や、「目覚めよと呼ぶ声が聞こえ」（BWV 140）などのように、まず曲やメロディーが良いと親しめるという接し方をしているからではないだろうか。

この本は、バッハのカンタータについて、一番大事なこと、すなわちその成り立ち、目的が教会暦にあること、当たり前のことであるが、普通私たちはしていないアプローチでまとめてある。私たちは、ある曲が良いから聴いてみよう、あのアリアが良かったから聴いてみようとなるが、この本は、この日曜日は、教会暦では三位一体節後、第何日曜日であり、その日のために書かれた音楽はどんなものだろう、と音楽の前に大前提として教会暦がある。その当たり前の事を教えてくれるだけでも、私にとっては、目から鱗である。

カンタータは、日曜の礼拝の一部であり、説教の補完であり、バッハの日常的職務であった。この本の素晴らしさは、その日曜日に読まれた聖書箇所を全文引用しているところである。待降節から 1 年間の 52 の日曜日と祝祭日の説教箇所を知ることができる。毎年同じ聖書箇所というのも知らなかったことである。次にその日のためのカンタータがすべて紹介される。カンタータの題名も聖書の内容になり、選ばれるコラール、アリアの歌詞にバッハの聖書解釈がうかがえる。バッハは、カンタータを通して聖書に基づく説教をしていたのである。生涯に 250 曲ほどのカンタータを残したとされ、そのうち 200 曲ほどが現存。5 年分を書き、3 年分以上が残されている。

本書では、カンタータ 200 曲のうち 161 曲がとりあげられ、そのうち 100 曲が深く説明されている。用いられているコラール歌詞、アリアの歌詞などを読むだけで、ひとつの説教なのであるから、自然に感動がわきおこる。音楽なしでも、歌詞の力により心が満たされる。

一例をあげると、待降節の第 1 日曜日では、朗読されたのは、直接降誕とは関係のないエルサレム入城の箇所、「マタイによる福音書」第 21 章 1-9 節で、バッハは、第 61 番、第 62 番、第 32 番のカンタータを作曲した。これらは、それぞれ音楽や歌詞が異なる。これらについて説明がある。

第 61 番は「さあ来てください、異邦人の救い主よ」で、第 1 曲はルターが翻訳したコラールを用いている。第 2 曲は、テノールのレチタティーヴォで「救い主が私たちの貧しい肉と血を身に受け取るためにやってきて、私たちを、血のつながった同胞としてお受け取りになった。あなたが私にしてくださらないことはない。あなたの光を祝福で輝かされる」と歌詞が明らかにされる。これを読むだけで、聖書の恵みに浸れることになり、音楽を聴かないのに、感動が与えられる。そして、音楽を聴いてみたいという気持ちになる。バッハのカンタータは聖書への扉を音楽とともに開いてくれる。

東京バッハ合唱団の活動は、まさにカンタータの世界が現実化している活動であり、この本の感動、すなわち日本語歌詞、という点でさらに感動を受けることができる。バッハが行っていた日曜礼拝音楽がここにあり、説教がここにある。バッハのカンタータの世界を一つ一つ辿り、個人のライフワークとして、カンタータとともに歩みたいと思った。

［上掲書：春秋社、2023 年 11 月刊］

月報 2025 年 8 月号 CONTENTS

・第 123 回定演アンケート（7/5、三崎町教会）…p. 2-3
・演奏会概要と終了報告（再掲） … p. 3
・連載：退屈するのはいそがしい［54］（大野博人）p. 4

第 123 回定期演奏会（2025/7/5、三崎町教会）
会場アンケート回答

［全 36 通のご回答をいただきました。今後の活動の糧とさせていただきます。一部をご紹介させていただきますが、お許しください。心より感謝申し上げます：編集部］

（1）演奏会全般について

・とてもすばらしく感動的でした。心のこもった情緒が表現された演奏でした。独唱も合唱も器楽もオルガンもすばらしかったです。
・合唱の方々の声が素晴らしかったです。
・すばらしい響きを体に感じました。
・思った以上に迫力がすごかったです。管楽器はもう少し控えめな編成の方が良いかも。
・教会堂での演奏は聴衆との一体感がある。
・大村先生の引退公演を聞きに来れて、とてもよかったです。長い間お疲れ様でした。
・本日の演奏会も大変すばらしいものでした。ありがとうございます。引退と聞いて心配しましたが、日本語版楽譜の完成に専念なさると分かり、納得です。
・とてもすばらしく安定した演奏でした。最初、楽器のひびきが強く、ちょっと不安でした。ソリストの方々ひとりひとりも、とても心に響く演奏でした。ありがとうございます
・ＣＤでバッハのカンタータを聴いたことはあるけど実際に聴くと全く違うと思った。
・バスでお話しした方にチラシをいただいて本日来ましたが、このような長く続いている団体の大切なコンサートにお招きいただきありがとうございました。いつもは１人でバイオリンを練習しているので、教会での合唱コンサートはとてもよい機会でした。バッハも好きです。
・多くの方が聴きにいらして満杯。お天気にも恵まれおめでとうございました。これからも楽しみに聴かせていただきます。
・オーケストラも合唱も響きがとてもよかったです。パイプオルガンや管弦楽の伴奏で、とても質の高い演奏会ですね。バッハ合唱団の名にふさわしい演奏を聴かせていただきました。
・とてもすばらしかったです。教会の会堂の中での演奏、合唱はキリスト教の教えやみことばを音楽を通して聞くことができたので感動的でした。
・出だしカッコ良い！ はなばなしい！（合唱） すてきな発声で歌われていました（Alt.） トランペットお疲れさまでした。Sop. がキンキンしなかった！よかった！（合唱） Sop. Ⅱ/Alt. 息づかいがあってました。待ち望め！（合唱）
・なんと「はつらつさ」と「やさしさ」に満ちた演奏だったことでしょう！（前半） 大村先生の透徹した眼差しが印象的でした。《マニフィカト》を大村先生最後の指揮で聴けて幸せでした。まさに、〈いまものちの世も とわにアーメン〉です。
・素晴らしかったです。ありがとうございました。
・全部それぞれ感動でした。
・最初の曲はオケと合唱のバランスで、オケ（特に前奏、間奏の管）の音量が大きすぎるように感じた（前の方の席だったからかも？）が、徐々に声量もアップし、聴きやすくなった。

（2）日本語演奏について

・やはり分かりやすかったです。特に《マニフィカト》でね。聴きなじんだメロディがどういう意味で歌われているのかよくわかって感動的でした。
・日本語だと親しみやすく、良いと思った
・「みんなで歌いましょう」で歌詞の親しみを味わいま

第 123 回定期演奏会 終了ご報告＜再掲＞

下記のとおり終了いたしました。
ご来場のみなさま、ご出演のみなさま、会場ご提供教会の関係者各位、運営ご担当諸氏、その他関係各位に心より御礼を申しあげます。

＜曲目＞

J. S. バッハ作曲、大村恵美子訳詞
・カンタータ第34番《おお永遠の火よ おお愛の源よ》
・カンタータ第23番《主なる神 ダビデの子》
・《マニフィカト わが心主をあがむ》ニ長調

＜開催日/会場＞

5 月 31 日（土）、日本キリスト教団・荻窪教会
6 月 7 日（土）、日本キリスト教団・三崎町教会
両日とも 14 時開演

＜演奏者＞

ソプラノ 藤原優花、ソプラノ 前田ひより、アルト 中島麻紀子
テノール 野中裕太、バス 及川泰生
管弦楽 コレギウム･アルモニア･スペリオーレ･ジャパン（ARS）
オルガン 田尻明葉、合唱 東京バッハ合唱団、指揮 大村恵美子

＜来場者数＞

5/31 荻窪教会：103 名、6/7 三崎町教会：216 名

●Youtube 公開中

三崎町教会（6/7）での公演は、下記ＵＲＬにて公開中です（制作：パラビジョン）。テロップ、歌詞などの文字情報は今後の団内作業ですが、先ずは音と演奏風景をご鑑賞ください。
→ https://youtu.be/MeztjfutQ0E
（右掲は、ＱＲコード）

●公演ＤＶＤ等、販売中

同じく、三崎町教会公演（6/7）の会場録音録画ＤＶＤが出来上がりました（制作：パラビジョン）。当日のプログラムを添え、振替用紙同封でお届けします（着後、お支払い）。
・頒価（税込み）
CD：2,200 円、DVD：3,300 円、BD：3,750 円
・送料 215 円（ゆうメール・250g以内）

◆上演用歌詞対訳は，当団ＨＰからご覧いただけます．
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

した。
・歌詞の内容がわかるので歓迎します。
・日本語で聴けるのはありがたいことです。訳もすばらしく心に響きます。
・バッハの日本語演奏につきましては、いろいろご意見もあろうかと思いますが、東京バッハ合唱団ならではと思っております。
・当初は訝しく思っていました。ドイツ語でなければ、響きが悪く、別の曲であり、バッハも意図していなかったと。しかし、先日の演奏会や、この合唱団の経緯を知り、バッハの伝記を購入して読み、その精神性を少し理解できました。実際、日本語での演奏もすばらしく、バッハ音楽の普遍性も感じることとなりました。聖書を翻訳していたルター、音楽そのものに価値を感じていた（例えば、世俗の曲を宗教曲に転用、使いまわし）バッハの志は、ここに受け継がれているのだと、実感しました。
・わかりやすく感情が揺れます。発声しづらいところ、はっきりと日本語が伝わってきました。
・特に日本語と意識してなくて、どちらでも同じだと思う。
・バッハ作品の理解は歌詞をいかに解釈するかにかかっている。ドイツ語の韻や語意を実感することは難しい!! しかし、日本語訳は多少のニュアンスのちがいはあるとしても、よく理解できる。
・わかりやすい言葉、内容で素晴らしいです。大村先生のご功績に感嘆しております。どちらの合唱アリアも素晴らしかったです。《マニフィカト》の三重奏よかったです。教会でバッハが聴ける。素晴らしいと再認識しました。
・特に独唱のところは、歌詞の意味がよく分かりました。
・違和感なく聴けました。
・日本語での上演は初めての事だったので、若干とまどいました。
・ドイツ語で歌われるよりも意味がわかり、納得して聞けました。歌詞、すばらしいです。
・バッハのカンタータの日本語演奏を聞くのは初めてでした。とても美しく、あたたかみがあって、すっと心に入ってきました。
・良かったです。分かりやすかったです。
・わかりやすくて、解説があるのでよかったです。
・Ｇｏｏｄ！　特に《マニフィカト》
・日本語が美しく、訳と思えないくらい自然に感じた。

（3）運営・会場等について

・大村先生の今までのご活躍に本当に敬意を表します。ありがとうございました。
・いつも素晴らしい合唱と演奏を聴かせていただきありがとうございました。
・大村さんが 94 才まで活躍されたことに敬意を表します。

■真夏の空と富士（撮影：千葉光雄、2025/7/18）

・良い時間を過ごせました。
・きれいな会場で非常によかった。
・開演 15 分前に到着しましたが、満席でした！
・入場無料というのは申しわけない限りです。目の前で聴けて幸いでした。
・荻窪のせまい所の熱気もよかったが、こちらの広々としたゆとりもよかった。
・意外と響く場所で、カンタータの演奏に適していると思います。
・とてもスムーズに行われている。
・初めてのトランペット、平和のひびき、この社会状況に響き心にきました。ソリスト若手の方々益々ご活躍期待しております。さいごの合唱、グロリア大合唱よかったです。
・合唱団の方々の歌っている姿も拝見できる並び方だと良いのでは、と感じました。
・スタッフのみなさん、教会のみなさん、ありがとうございました。
・こんなに本格的な演奏を教会で聴くのは初めてでした。会場の規模、演奏者との距離、曲のメッセージを考えると、やはり教会はいいものだなと思いました。駅から近いのもありがたいです。
・パイプオルガンもあって素敵な教会ですね。響きが良かったです。
・大村先生ありがとうございました
・恵泉女学園の卒業生です。中高 6 年間大村先生のオルガン演奏を礼拝で聴いて育ちました。今でもオルガンの曲、バッハの曲を聴くと心が安らぎます。大人になってからコーラスを始めました。今日は心あたたまる演奏会、感激いたしました。どうぞこれからもお身体大切に。又聴きに来たいと思います。ありがとうございました。

※月報 6 月号（No.. 756）には、荻窪教会（5/31）での公演の速報とアンケート回答が、また 7 月号（No. 757）には、主宰者最終指揮へのメッセージが載っています。あわせてご覧ください。
（当ページ脚部に、団ＨＰの月報への移動のご案内）

◆月報バックナンバーは，当団ＨＰからご覧いただけます．
http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm

＜連載随想＞
退屈するのはいそがしい［54］

グールドの スクランブル･エッグ

安曇野閑人　**大野 博人**

そのスクランブル・エッグはちょっとパサパサしていた。不味くはないけれど、きめの細かさはない。カナダ・トロントの中心街にある「フランズ」というレストランの一品だ。店を出たとたんに、何を食べたか忘れてしまうような味わい。

20 世紀最大のピアニストのひとり、グレン・グールドがこの店の常連だった。夜通し開いているここに午前２時とか３時というとんでもない時間にやってきては、決まった席にすわり、スクランブル・エッグを注文したそうだ。

トロントで生まれ育った天才は、若き日には世界を飛び回り、カラヤン指揮のベルリン・フィルなどとも共演していた。しかし 30 代でコンサート活動をやめ録音に力を注ぐようになる。その後、50 歳で亡くなるまでずっとトロントが拠点だった。

彼が最初にレコード録音したのがバッハのゴルトベルク変奏曲。発売されると、斬新な演奏が大きな反響を呼び、クラシック音楽としては空前の大ヒットとなった。晩年にもう一度同曲を録音したが、テンポなどがすっかり変わったというので、また世界のファンを驚かせた。

私もその一人だ。

10 代のころに、一回目の録音に出会って感動した。グールドを聴くのもゴルトベルク変奏曲を聴くのも初めてだったから、どちらに感動したのかはわからない。ただ草の葉の上を転がっていく透明な水滴のような音に魅せられた。新録音が出たときは興味津々で聴いて、最初とはまったくちがうテンポにびっくり。でも音の印象は変わらなかった。それ以来、バッハのほかの曲やブラームスなどを彼の録音で繰り返し聴いた。

実はこの夏、トロントに暮らす娘一家の第二子誕生にともない「猫の手」として来ている。せっかくだからこの機会にグールドの足跡を少し訪ねてみようと思った。けれども、まず「フランズ」でいささか戸惑ってしまった。

大通りに面したカジュアルなレストラン。昔のファミレスといった趣。店の奥の壁には一人でテーブルに座るグールドの、あまり巧みではない絵が描かれていた。しかし、それ以外はどこにも歴史的人物をたたえる印は見当たらない。メニューにも言及なし。

地元から世界に発信した大芸術家を、観光のダシにはしないというか、冷たいというか……。

「フランズ」に続いて、縁の深かったカナダ公共放送（CBC）のセンターに足を運んだ。そこに「グレン・グールド・スタジオ」というスペースがあり、使用したピアノが展示してあると聞いたからだ。スタジオはたしかにあったが、一般公開されていなかった。入り口にベンチに座るグールドの銅像があるだけ。

気持ちを取り直して、彼が住んでいたアパートまで行ってみた。けれど、やはり建物の前に彼についての地味な説明板があるだけで、中に入れない。

拍子抜けのグールド巡礼になってしまった。気勢をそがれるのは、勝手に期待感を高めた自分のせいでもあるのだが……。

トロントはカナダ最大の都市で経済の中心地。東京 23 区ほどの広さに 250 万人ほどが住んでいる。周辺を合わせた都市圏人口は 600 万人弱。かなり大きいとはいえ、東京などよりずっと落ち着いた雰囲気だ。商店もレストランも地下鉄も人混みでごった返す感じがない。ゆったりしている。街並みは近代的できれい。オンタリオ湖畔も美しい。

ただ、刺激は少ないと言えるかもしれない。

かつて大手商社に勤めていた友人が、社内でこんなジョークがはやったことがあると話してくれた。

転勤の決まった同僚がいた。表情がさえない。「どこに？」と尋ねると「この目を見ればわかるだろう」と応える。「なんか濁っているみたい」というと、「そこまでひどくはない」。このやりとりで赴任先がわかった。「あ！トロントか」。

商社マンにとって、気が滅入る街ではないけど、心が躍る街でもない、ということか。

グールドはそんな街に暮らし、気が滅入るわけではないが、心が躍るわけでもないスクランブル・エッグを食べ続けた。「しかし」なのか「だから」なのか、そこで心が躍る音を追い求めた。

そういえば、世田谷・経堂の伝説の「カフェハウス・バッハ」にも、グールドのレコードはたくさんあったのだろうか。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）

■グールドが毎日のように食べたというスクランブル･エッグ
（写真提供と説明：筆者）

［編集後記］
↑、新旧のゴルトベルク、ときどき聴き比べていたらしい（K）